

[D年] 聖霊降臨節第7主日(2020年7月12日)

【旧約聖書日課】ホセア書 14章2～8節

- 2 イスラエルよ、立ち帰れ
あなたの神、主のもとへ。
あなたは咎につまずき、悪の中にいる。
- 3 誓いの言葉を携え
主に立ち帰って言え。
「すべての悪を取り去り
恵みをお与えください。
この唇をもって誓ったことを果たします。」
- 4 アッシリアはわたしたちの救いではありません。
わたしたちはもはや軍馬に乗りません。
自分の手が造ったものを
再びわたしたちの神とは呼びません。
親を失った者は
あなたにこそ憐れみを見いだします。」
- 5 わたしは背く彼らをいやし
喜んで彼らを愛する。
まことに、わたしの怒りは彼らを離れ去った。
- 6 露のようにわたしはイスラエルに臨み
彼はゆりのように花咲き
レバノンの杉のように根を張る。
- 7 その若枝は広がり
オリーブのように美しく
レバノンの杉のように香る。
- 8 その陰に宿る人々は再び
麦のように育ち
ぶどうのように花咲く。
彼はレバノンのぶどう酒のようにたたえられる。

【使徒書日課】使徒言行録 9章36～43節

³⁶ヤッファにタビタ——訳して言えばドルカス、すなわち「かもしか」と呼ばれる婦人の弟子がいた。彼女はたくさんの善い行いや施しをしていた。³⁷ところが、そのころ病気になるって死んだので、人々は遺体を清めて階上の部屋に安置した。³⁸リダはヤッファに近かったので、弟子たちはペトロがリダにいると聞いて、二人の人を送り、「急いでわたしたちのところへ来てください」と頼んだ。³⁹ペトロはそこをたって、その二人と一緒に出かけた。人々はペトロが到着すると、階上の部屋に案内した。やもめたちは皆そばに寄って来て、泣

きながら、ドルカスが一緒にいたときに作ってくれた数々の下着や上着を見せた。⁴⁰ペトロが皆を外に出し、ひざまずいて祈り、遺体に向かって、「タビタ、起きなさい」と言うと、彼女は目を開き、ペトロを見て起き上がった。⁴¹ペトロは彼女に手を貸して立たせた。そして、聖なる者たちとやもめたちを呼び、生き返ったタビタを見せた。⁴²このことはヤッファ中に知れ渡り、多くの人が主を信じた。⁴³ペトロはしばらくの間、ヤッファで革なめし職人のシモンという人の家に滞在した。

【福音書日課】ヨハネによる福音書 4章43～54節

⁴³二日後、イエスはそこを出発して、ガリラヤへ行かれた。⁴⁴イエスは自ら、「預言者は自分の故郷では敬われないものだ」とはっきり言われたことがある。⁴⁵ガリラヤにお着きになると、ガリラヤの人たちはイエスを歓迎した。彼らも祭りに行ったので、そのときエルサレムでイエスがなされたことをすべて、見ていたからである。

⁴⁶イエスは、再びガリラヤのカナに行かれた。そこは、前にイエスが水をぶどう酒に変えられた所である。さて、カファルナウムに王の役人がいて、その息子が病気であった。⁴⁷この人は、イエスがユダヤからガリラヤに来られたと聞き、イエスのもとに行き、カファルナウムまで下って来て息子をいやして下さるよう頼んだ。息子が死にかかっていたからである。⁴⁸イエスは役人に、「あなたがたは、しるしや不思議な業を見なければ、決して信じない」と言われた。⁴⁹役人は、「主よ、子供が死なないうちに、おいでください」と言った。⁵⁰イエスは言われた。「帰りなさい。あなたの息子は生きる。」その人は、イエスの言われた言葉を信じて帰って行った。⁵¹ところが、下って行く途中、僕たちが迎えに来て、その子が生きていることを告げた。⁵²そこで、息子の病気が良くなった時刻を尋ねると、僕たちは、「きのうの午後一時に熱が下がりました」と言った。⁵³それは、イエスが「あなたの息子は生きる」と言われたのと同じ時刻であることを、この父親は知った。そして、彼もその家族もこぞって信じた。⁵⁴これは、イエスがユダヤからガリラヤに来てなされた、二回目のしるしである。

「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

ホセア書 14章2～8節

2 イスラエルよ、立ち帰れ

あなたの神、主のもとへ。

あなたは自分の罪につまずいた。

3 あなたがたは言葉を用意し

主に立ち帰って、言え。

「どうぞ罪をすべて赦し

良いものを受け取ってください。

私たちは唇の実を献げます。

4 アッシリアは我々の救いとはなりません。

我々はおもはや、馬には乗りません。

自らの手の業にすぎないものを

私たちの神だとは二度と言いません。

ただあなたによってこそ

みなしごは憐れみを受けるのです。」

5 私は、背いた彼らを癒し

喜んで愛する。

私の怒りは彼らから離れる。

6 私はイスラエルにとって露のようになる。

彼は百合のように花を咲かせ

レバノン杉のようにその根を下ろす。

7 その若枝は茂り、麗しさはオリーブの木のように

かぐわしさはレバノン杉のようになる。

8 人々は帰って来て、その陰に宿り

穀物のように実り

ぶどうの木のように芽を吹く。

彼はレバノンのぶどう酒のように記憶される。

使徒言行録 9章36～43節

³⁶ヤッファにタビタ——訳すとドルカス[「ガゼル」の意]——と言う女の弟子がいた。数々の善い行いや施しをしていた人であった。³⁷ところが、その頃病気になって死んだので、人々は遺体を清めて階上の部屋に安置した。³⁸リダはヤッファに近かったので、弟子たちはペトロがリダに聞いて、二人の人を送り、「どうか、私たちのところへ来てください」と頼んだ。³⁹ペトロはそこをたって、一緒に出かけた。ペトロが到着すると、人々は階上の部屋に案内した。やもめたちは皆そ

ばに寄って来て、泣きながら、ドルカスと一緒に作った数々の下着や上着を見せた。⁴⁰ペトロが皆を外に出し、ひざまずいて祈り、遺体に向かって、「タビタ、起きなさい」と言うと、彼女は目を開き、ペトロを見て起き上がった。⁴¹ペトロは彼女に手を貸して立たせた。そして、聖なる者たちとやもめたちを呼び、生き返ったタビタを見せた。⁴²このことはヤッファ中に知れ渡り、多くの人が主を信じた。⁴³ペトロはしばらくの間、ヤッファで革なめし職人のシモンと言う人の家に滞在した。

ヨハネによる福音書 4章43～54節

⁴³二日後、イエスはそこを出発して、ガリラヤへ行かれた。⁴⁴イエスご自身は、「預言者は、自分の故郷では敬われないものだ」と証言されたことがある。⁴⁵ガリラヤにお着きになると、ガリラヤの人たちはイエスを歓迎した。彼らも祭りに行ったので、その時エルサレムでイエスがなさったことをすべて、見ていたからである。

⁴⁶イエスは、再びガリラヤのカナに行かれた。そこは、前にイエスが水をぶどう酒に変えられた所である。さて、カファルナウムに王の役人がいて、その息子が病気であった。⁴⁷この人は、イエスがユダヤからガリラヤに来られたと聞き、イエスのもとに行き、カファルナウムまで下って来て息子を癒してくださいるように頼んだ。息子が死にかかっていたからである。⁴⁸イエスは役人に、「あなたがたは、しるしや不思議な業を見なければ、決して信じない」と言われた。⁴⁹王の役人は、「主よ、子どもが死なないうちに、お出でください」と言った。⁵⁰イエスは言われた。「帰りなさい。あなたの息子は生きている。」その人は、イエスの言われた言葉を信じて帰って行った。⁵¹ところが、下って行く途中、僕たちが迎えに来て、その子が生きていることを告げた。⁵²そこで、息子が良くなった時刻を尋ねると、僕たちは、「昨日の午後一時に熱が下がりました」と言った。⁵³それが、イエスが「あなたの息子は生きている」と言われたのと同じ時刻であったことを、父親は知った。そして、彼もその家族もこぞって信じた。⁵⁴これは、イエスがユダヤからガリラヤに来てなされた、第二のしるしである。

黙想のためのノート**次主日聖書日課について**

・7月12日「聖霊降臨節第7主日」の日課主題は「生命の回復」。「復活」信仰は、イエス・キリストが新で葬られた後の三日目に復活された、という出来事に限定されるものではない。主イエスの時代のユダヤ教では、すでに「復活」信仰をめぐって相反する立場をとる宗教グループが存在した（「復活」を認めるファリサイ派、「復活」を認めないサドカイ派）。

・旧約時代の前期、イスラエルの古典時代（「イスラエル正史」の世界）を背景とする旧約文献は、「人間」を肉体を有した誕生から死までの存在としてのみとらえ、「死」に伴う関心はもっぱら無事に「葬られる」ことに向けられている。このように、素朴な合理性（日常的に認識できる出来事の枠組み）に基づいた現世主義的な死生観に支配されており、来世や死後の世界が「土に還る」という事実を超えたものとして描かれることはない。旧約時代の後期、すなわち、バビロン捕囚を経て、エルサレム神殿再建と共に進められた正典編纂によって形成された宗教共同体としての「ユダヤ教」では、ペルシャやギリシアの宗教思想・世界観の影響を受け、多様な死生観が見られるようになっている。特に「来世」観は、ペルシャの宗教思想から得られた新しい視点で、「天空を支配する諸霊・神々」という世界観と共に、ユダヤ教の死生観に影響を与えている。「来世」や「死後の世界」を広く受容するようになった背景には、民族・国家間の紛争や支配・被支配の関係が複雑さを増す中で、現世（現実社会）における不条理や悪の問題が人々の意識の中で顕在化してきたことがあったと考えられる。現世では解決不能である事柄が来世で解決するという思考方法は、現世だけを見て因果応報の合理性を適用しようとするよりも、自由に考え、想像し、語ることを可能にしたのであろう。

・主イエスや弟子たちの教会、さらに使徒パウロら初代教会が共有していた死生観・「復活」信仰は、元来、ファリサイ派が広く共有していたものであったことは間違いない。彼らの「復活」信仰は、パウロが端的に触れるように（ロマ 14:10、Ⅱコリ 5:10）、終わりの日に神の最後の審判をすべての者が受けなければならないという終末論的神学思想に基礎づけがある。一方で、初代教会では、まず「主イエスの十字架死と復活顕現」という経験が弟子たちに共有されることによって、「贖罪による救済」という信仰が新しい「宗教共同体」を形成する原動力となったが、その中で、「主イエスの復活」という証言と、従来のファリサイ派由来の「復活」信仰が、「復活」という観念において結びつき、統合的な神学を形成することになったと考えられる。

・福音書や使徒言行録に伝えられる「死者の蘇生」の奇跡物語は、主イエスや使徒らの「働き」の一つとして広く認められた「病者治癒」伝承として物語られたものであると考えられるが、伝承の過程で、「主イエスの復

活顕現」伝承を補強するものとして伝承に付加・修正が施された場合もあると考えられる。伝承物語ごとに、両側面からの考察をすることができるだろう。

旧約日課(ホセア 14章より)

・「ホセア書」は、「十二小預言書」の最初の書。預言者ホセアは、「アモス書」の預言者アモスとほぼ同時代、北王国オムリ王朝ヤロブアム王の時代に預言活動を開始し、北王国滅亡までの時期、おそらく後半生は南王国に拠点を移して活動を続けた預言者。同時代の南王国には預言者イザヤ（「イザヤ書」前半39章までで預言者の物語として登場する「第一イザヤ」）がおり、一定の勢力を持つ祭司・預言者集団を形成していた。ホセアら北王国の預言者の伝統は、おそらく、北王国滅亡後に南王国のイザヤら預言者集団に吸収され、南北王国のルーツを統一的に見る「イスラエル正史」形成に一定の寄与をしたものと推測される。

・日課箇所は、本預言書最終章の一部。預言者は、北王国イスラエルの罪咎を「金の子牛」や「バアル」の問題として指摘してきたが、預言書冒頭に置かれた「ホセアの妻ゴメル」の逸話（比喻）ですでに示唆していたように、最悪の背信者をも迎え入れる「慈しみ（愛）」と「憐れみ」とを旨とする神のもとに背信のイスラエルが立ち帰るように呼びかけている。ここでは、「悔い改め」さえ背信者の自発的なものではなく、あくまで与えられた（恵みの）受動的行為としての「悔い改め」であることが、明確に描き出されている。現代の個人主義的信仰観の中でしばしば見られる「主体的な悔い改め」の強調や焦点化とは異なる。

使徒書日課(使徒 9章より)

・「使徒言行録」は、「ルカによる福音書」の続巻（下巻）として著された「初代教会形成史」で、新約中では事実上唯一の「正史」としての位置づけを与えられている。本書は、前半はおもに使徒ペトロを中心に、後半はもっぱらパウロ＝パウロを中心に物語が進行する。日課箇所の9章は「パウロの回心」の逸話が大半を占めるが、その前後（8章、10章）にはペトロを中心とするエルサレム教会が異邦人伝道へと引き出されていく出来事が置かれており、本書構成上、重要な転換点を描く場面となっている。日課箇所（および前段 32～35節）は、そのような物語進行を立ち止まらせるようにして、ペトロの「病者治癒・死者蘇生」の奇跡伝承が置かれている。これらの奇跡行為は、弟子たちが主イエスから授与された「権能」に基づいている（ルカ 9:1）。

・日課箇所の「タビタ＝ドルカス」伝承は、「死者蘇生」の奇跡伝承として旧約（預言者）・福音書（主イエス）の伝統に沿った描き方がされている。同時に、ここには初代教会が営んだであろう「葬送」の作法が示されている。対照比較として想定されているのは、ルカ 7:11 以下に描かれるような「悲嘆」を主眼とするユダヤの葬送の伝統であろう。タビタの葬送は、悲嘆がな

いわけではないが、生前の信仰者としての行いを想起・共有する営みとして描かれる。そこにペトロの「死者蘇生」奇跡が加わることによって、キリスト者の葬送が、故人の生前を想起することの中から、生者と死者との境界線を越えた関係に生き始めるという「復活」信仰を明らかにする場とされることを示唆している。

福音書日課(ヨハネ 4 章より)

・日課箇所は、「サマリアの女」の逸話に続く箇所、冒頭の「二日後」という描写によって前段との関連性が示唆されている。すなわち、前段で「主イエスは、サマリアでは受け入れられないはずだが、実際は受け入れられた」と描かれたのに対応するように、日課箇所では、「故郷では敬われないはずだが、実際は歓迎された」と描かれる。このような描き方はヨハネ福音書独自の視点で、共観福音書では、基本的にどちらでも「受け入れられなかった」という描き方をしている。

・後半 46 節以下の逸話は、共観福音書で場面をカファルナウムとして描かれている「百人隊長の僕の癒し」伝承に類似しているが、詳細が大きく異なっており、別の意図をもって伝承された逸話と考えられる。特に場面設定は、2 章で描かれた「カナ」を指定し、わざわざ説明を付しており、「カナの婚礼」の逸話との関連性に目を向けさせているのは明らかである。

・共観福音書が「百人隊長」と明確にローマ人(またはローマ皇帝に忠誠を誓った者)の信仰を描いていたのに対して、日課箇所は「王の役人(バシリコス)」としている。この語は「王に属する者」という語義で、属性を示す場合だけでなく、抽象的な形容詞としても用いられる(ヤコブ 2:8)。

・48 節の主の言葉は、共観福音書で主イエスがファリサイ派を批判した言葉に類似する(マタイ 12:38 以下など)。しかし、ヨハネ福音書では「しるし(セーメイオン)」は必ずしも否定的に扱われておらず(「七つのしるし」が重要な逸話として置かれている)、「しるし」を「見る」ことに基づく信仰が肯定的に描かれている。ところが、この「王の役人」は主イエスの「言葉を信じて帰った」と描かれており、「見ないのに信じる人」(ヨハネ 20:29)の実例となっている。

・50 節/53 節の「生きる」は、文法上は単純な現在形で 51 節と同じく「生きている」(聖書協会共同訳参照)。ここで描かれているのは、主の言葉として告げられた「生きている」ことを信じる信仰。

来週の誕生日 (7 月 12 日～18 日)

秦純子、坂上すみれ、白阪めぐみ、渡邊剛。

主日礼拝の讃美歌から

・21-28 番「み栄えあれや」は、伝統的な典礼で詩編や讃歌(聖書の句に基づく歌)に続いて唱えられた頌栄(栄唱)で、ラテン語「グロリア・パトリ」で知られる。これに、ドイツ生まれで 19 世紀米国の聖公会でオ

ルガニストを務めたチャールズ・マイネケが曲を付けて教会音楽集の中に収めた。メソジスト教会の讃美歌集にも収められ、広く歌われてきた。

・21-486 番「飢えている人と」は、1977 年、ドイツの牧師 F.K.バルトの作詞、カトリックの音楽家 P.ヤンセンの作曲で創作された讃美歌。

・21-540 番「主イエスにより」(= I 403「かみによりて」)は、18 世紀英国のパプテスト派牧師ジョン・フォーセットが、地方の小教会に仕えていたときにロンドンの大教会から招聘され、いったんは受諾することにしながら最後に再考し小教会にとどまった際に自身の思いを記した詞を讃美歌詞として発表したもの。曲は、ドイツの作曲家ヨーハン・ネーゲリの歌集から 19 世紀米国の作曲家ローウェル・メーンソンが讃美歌用に編曲したもの。英語圏では今でも広く讃美歌集に採用され、歌われている。

21-28「み栄えあれや」

GLORIA PATRI

(ラテン語)

Gloria Patri, et Filio, et Spiritui Sancto. / Sicut erat in principio, et nunc, et semper, / et in saecula saeculorum. / Amen.

(聖公会「小栄唱」)

栄光は 父と子と聖霊に

初めのように、今も 世々に限りなく アーメン

21-486「飢えている人と」

Brich mit den Hungrigen dein Brot

1. Brich mit den Hungrigen dein Brot, / sprich mit den Sprachlosen ein Wort, / sing mit den Traurigen ein Lied, / teil mit den Einsamen dein Haus.
2. Such mit den Fertigen ein Ziel, / brich mit den Hungrigen dein Brot, / sprich mit den Sprachlosen ein Wort, / sing mit den Traurigen ein Lied.
3. Teil mit den Einsamen dein Haus, / such mit den Fertigen ein Ziel, / brich mit den Hungrigen dein Brot, / sprich mit den Sprachlosen ein Wort.
4. Sing mit den Traurigen ein Lied, / teil mit den Einsamen dein Haus, / such mit den Fertigen ein Ziel, / brich mit den Hungrigen dein Brot.
5. Sprich mit den Sprachlosen ein Wort, / sing mit den Traurigen ein Lied, / teil mit den Einsamen dein Haus, / such mit den Fertigen ein Ziel.

21-540「主イエスにより」

Blest be the tie that binds

1. Blest be the tie that binds / Our hearts in Christian love; / The fellowship of kindred minds / Is like to that above.
2. Before our Father's throne / We pour our ardent prayers; / Our fears, our hopes, our aims are one, / Our comforts and our cares.
3. We share our mutual woes, / Our mutual burdens bear, / And often for each other flows / The sympathizing tear.
4. When here our pathways part, / We suffer bitter pain; / Yet, one in Christ and one in heart, / We hope to meet again.
5. From sorrow, toil, and pain / And sin we shall be free / And perfect love and friendship reign / Through all eternity.